

# 母塾

2021・5・11

VOI-56



illustrated by Kurumi

『 誕生日には 恩を着せよう 』 いのはなはるこ

5番目・三男の15回目の誕生日でした。  
我が家では年に8回ケーキが食べられます。

三男は15年前に自宅で生まれました。  
助産師さんが到着する前に、お風呂で産まれました。  
その時、両国から助産師さんが駆けつけるまでの記憶が曖昧です。  
私のがのんびりしていたのか？赤ちゃんがせっかちだったのか？

ママたちの出産話を訊くのが好きです。  
「12時間苦しんだの」「2か月前から入院だった」とそれぞれです。  
どのママも出産に自分のドラマを持っています。  
それぞれがまさに命がけです。ふたつの命を賭けています。  
私も毎回、陣痛が来ると、「全人類の母はこれを越えたの？」と驚きました。  
明治時代まで、出産から1か月以上生きられるのは10人に9人でした。  
それから1才になれるのは9人中8人です。今は奇跡の時代を生きています。

その子の誕生日くらいは、出産の大変さを言いたいです。  
どんなに苦しかったか。命がけでも産みたかったか。  
あんなに苦しんで産んだのだから。大切に生きてもらわないと。許さないから。  
毎年、忘れないように恩を売りたいです。

そして、あの日からママにしてもらってありがとう。  
そして、今日も一緒に居てくれてありがとう。  
苦しみをどんどん忘れられるくらい「産んでよかった」になっています。

どのママも「自分の命を賭けた日」が子どもの誕生日です。  
誇らしく、大袈裟に、恩を着せてもいい日なのです。